沼尻桂一郎編輯

西南太平記

五号

下

A434
8

西南太平記五編巻之下

東京　沼尻経一郎編輯

第十四

賊軍と共ゐ力士進撃奮戰
并総督府本陣と高瀬へ移る

今回鹿児島ゐ斯る無名の兵を起したるも實ゐ怪しむべき事あり平素ゐ在つてハ中々確乎たる議論あり已に去月中伊藤新八と云へる者東京より鹿児島ゐ帰りて桐野ゐ面會し政府ゐ於てハ今

48-7791

非常の改革と行ひ已ふ全國の租税を減じ又諸官省を改正したる次第を云々なりと物語りしふ桐野聞て夫ハ結構なる事なりといふ既ふ鹿児島士族ハ一般賊の名義ありと虽も議論ありて暴士族ハ肥後出発し屢々一揆を起せる好で危難を侵し賊徒今是まぐるりと山鹿を捨て走る依て官軍ハ三月二十一日午后ふ至りて兵を二手ふ分ち一手ハ植木に進ミ一手ハ賊徒の隈府ふ走るを追撃をるふ賊ハ頻ふ官兵を狙撃をるに功をなる戦場ふて死體の模様ふ見せ各轉り居り敵とさして心を緩ましめ不意ふ命射をるゞ由ふ其何所より撃したりし知らざらしむるゞ故官軍も之ふハ殆ど困却したる由又碇泊の海軍ハ近海ふありと雖も之を救ふ由なるらん是れ謂所迅雷の耳を掩ふふ及ざるの妙訣なり該港且陷いらを是より官軍進撃の便路を断ち上

西の通信を拒むのみならず殊ふ金穀弾薬の資給い充分ふ事足るべし熊本の鎮兵此変を聞き救援の師を出さるべき我が軍い其兵の出るを待ち直ちふ川尻より鎮城を囲まゞ城中驚惶しく果敢しく防禦とるすべきとも覚えず長嶺既ふ我手ふ陥らば二筑両豊の士民い響の如くふ靡ド再度一兵ふ血塗らずして九州い容易く定まるべし願はくい檄文を馳せ使者と遣る如き迂策を廃して此の神機妙発の奇術ふ出ん事こそ望ましく候へと詞を盡して諫めゝれども西郷桐野之を聴うで兵い名を先にす我等大軍を帥ゐて東上すと聲言せゞ熊本鎮兵の如きい風を望んで潰散するるらんや既ふ西京より官兵追々彼の地へ出発るせゝ同府下島原ふ住居せる角力頭取朝男山市五郎い九州出立したる角力取二百餘人い鹿児島ふ興行し

あさとやま
朝男山の
でし
弟子賊の
ぢんぷう
先鋒とな
る

縣下ハ逼留せーよと朝男山ヶ聞て報知せーゞ
彼の地ハ最早戦地となりて國界の通行ヶ差止ゆ
し風聞ハて市五郎ハ弟子二三人ヶ連れ下の関迄
出張するところ我弟子四名ゞ頭となり肥後の水俣
へ操出せーハ過日暴徒勢揃ヶして鹿児島城大
手外の跡ハて當時ハ牧牛場なり其地ハ凡二町餘
りにて四面ハ柵ヶ結ひ廻ーたる廣野なり其日ハ
折節大雪ハて寒さ殊ヶ劇ーく風ハ宛然肌ヘを

徹すがゝりて雪尺そ三寸餘りも積り此國ハ
てハ近来稀なる事のよーゞ又勢揃の時刻ハ午前
六時ハて彼の私学校の壮夫どもハ或ハ股引半天
草鞋ハゝ各刀ヶ横たへ腰ハハ替草鞋一足と弁當
ヶ括り付け吾劣らゞと駈集りーヶ流石ヶ雪も
此傍りハ積りも行ハねあるさゆるりー斯て隊將
等も其場ヶ来り舊城下ヶ逼留せーヶ角力ヶ暴
徒ゞ矢庭ヶ他行ヶ押留あられて身をひき帰り

遂に熊本へ乱入の時何れも引卒せられ戦争の場に出る毎に先鋒に押立られて水に浸せる畳二三畳と重ねて是を持せ銃丸を防ぎ宜程を見たらひて此畳を一二尺引揚れば賊徒い其下より潜り出て真一文字に官兵の群がる中へ斬入て毎度勝利を得たるより又濡したる畳い大砲の弾丸も打ち貫くとも唯中りなる時い畳と共に仰向けに倒るるのみなるを角力仲間ふい一人も重傷を負ひし者なりと語りたるより此四人へ山鹿口の賊徒に使役れて居たりしが透を看て辛く山路を逃のびて官兵の陣に入り其事由を述て危く帰り来りしあぞ官軍の本営へ上申ふい去る年熊本の事件ふ東京の力士共官軍方へ御加勢及び秋月の賊を討退けし名誉あらば我等共今般の御用相勤度旨を願出るに追て沙汰に及ぶもあり各い去る十八日に西京へ帰りるといふ

同二十一日山田陸軍少将ハ西京より長崎へ向けて出発せらるゝ又熊本城へハ賊軍ハ攻撃甚ゞ熾よして其賊軍ハ先年佐賀の乱賊中より天綱と脱し潜行せし徳久孝次郎石井武之助の二人ハ現ハ賊中一方の隊長となり先鋒ハ進んで激戦なせしゞ未ゞ運命尽ざるやハ本の葉口ハ一方の隊長となり頻ハ官兵を狙撃す素より敢勇必死の徒ハて其狙撃するハ功をなる賊徒ハ官軍の猛き勢ひハ敵し難くして引退きしとゝ茲ハ八代口の方ハ同二十一日午后四時頃鏡町宮原の両所ハ於て双方激戦したれども果敢しき勝敗もるゝ翌二十二日の午后一時頃ハ至り鏡町の官軍ハ賊徒二十名程と斃したるとも宮原の戦争ハ賊徒官軍と挟撃せんと間道より進んで官軍の右翼なる背後より襲来るハ因て官軍ハ非常ハ力戦して之と追退けなるハぞ一度ハ官軍勝

石井徳久
隊長とる
つよく奮戦
為す

ありしが又めも賊徒ハ間道と廻りて宮原の手前ふ
押寄せ少しも猶豫せずして進撃し頗る苦戦る
りしかど官軍ハ八代より本陣を定められたり是より
り先き孟春艦ハ長崎より熊本へ廻り過る十日午
前七時より十一時まで肥後飽田郷鹽屋村沖より
り賊営へ向けて七十斤砲五発二十斤砲三発を放
射し又放火の為め端舟を出して上陸せんとしき
れども賊徒烈しく小銃を打掛くるゆ付進む能ハ

ず十一日ハ大砲を五発放射し十二日午前六時より
日進艦と共ハ大砲を乱発す午後七時三十分より
両艦ハて再び砲撃す此時孟春艦より二十七発放
射して終に端舟ハ上陸したりとハ又官軍の
今日まで費せし弾薬ハ既ゆ一千万発ゆ至りたり
と其激戦たる知るべきなり又陸軍省より大釜を
三百餘と兵粮焚出しゆ必用の道具と取揃へて毎
日のやうゆ荷造りとし戦地へ差送られ黒田老

公は老年の身ながら戦地の事ゝ官軍方へ尽力し鹿児島ゝ出張され島津氏ゝも注意とせしと云ふ

鹿児島縣令ゝ任ぜらるゝ岩村通俊は大坂府下今橋二丁目畑中喜作方ゝ止宿され暴徒鎮静のうへ

みて任所へ赴くべき支の由依て右の旅宿を仮廳とせられ該縣の属官新拝命も追々有るべしとて同

二十二日賊軍再び盛返し植木ゝ迫る其勢ひ慓悍みして頗る激戦あり此が賊は退て向坂木留の要

害の地ゝ拠て必死防戦す故ゝ官軍援兵を操出さんとて詰れたりと田原坂山鹿口の賊徒は胸壁を

鳥の巣高井ヒロヲ大津邊ゝ築きて之を固守し

同廿三日午前八時頃植木口より木留口へ官軍進

撃し川路大警視も長崎より山田少将と共ゝ出

帆し此時残らず其手勢は進撃したれど未だ臺

場は抜く能はずして其手勢は進撃の際警部の

即死一名手負二名其他即死手負十五名あり

り此日征討総督有栖川二品親王ハ本陣を高瀬
ヘ移されたりと昨今官軍の手負頗る多しと
海軍々函局詰の函員ハ残らず出張したるよつて
此度同局の生徒十六名を選んで戦地ヘ遣はされ
東京其他諸々の病院よりハ官軍の疲者の深手
等を治療するハさも憐れまして目も當られぬ姿
なりと又此ハど戦地より神戸へ着したる官軍
の手負人へ辱なくも
皇后宮より數多の綿撒

糸と下し賜わり猶又戦地へも廻さるゝ由にて岩
倉公の家族方と始めて戦地へ送り軍医看護卒ゞ
昼夜治療に手と盡す一助に供せんと夜と日とつ
いで製調せらるゝ又鹿児島より勅使柳原公帰
府の時ハ中原等と請取り縣令より左の通り達
したり

先般布達ニ及ビ置候中原尚雄等口供ノ
趣ハ上申ニ及ビ決裁ヲ待チ候更其際ニ

病院ヨ痍者等ヲ治療シ綿撒糸ヲ用ヒ

當リ西郷隆盛以下ノ者共上京ノ途中已ニ征討被仰出候然レ𪜈中原尚雄口供ノ趣ハ尚其筋ニ於テ糾弾ヲ経至當ノ御處分可右之為メ今般勅使護衛ノ巡査ヲ以テ上國ニ護送セラレ候條管下人民ハ深ク此旨ヲ了知シ流言浮説ニ惑ハズ各安堵可致此旨相達シ候事

明治十年三月十二日

鹿児島縣令

大山綱良

右の如くなりしが豈計らざるんや其身が勅使と倶ふ上京の際兵庫縣令森岡昌純より位記褫奪の事を申し渡さるゝに過日の支なりしが又大山と森岡氏とい至つて懇親の間がらふて已に壬戌の年有名なる伏水の寺田屋事件の節い共に激徒鎮撫に赴きたる支なりとのことなるいよ〳〵三月二十二日午前十時に中原等と共に東京へ護送に直に大山と司法省構内の檻倉へ入れられ中

原と始めて拘留に逢ふたる人々い凡て親類預け
お相成りしといふ此所に陸軍卿代理にて西郷陸
軍中将と今西の事件に付て品ふよりあを西郷隆
盛と自ら殺し政府へ功を立んと欲せるい古語お
曰く大義親を殺すといい則ち是等のを我云ふる
らん近頃西郷中将い或友人に語られしはい予
い賊の勢ひ盛んにして遂に東海に来るを望むと
然らざれば家兄と兵馬の中に相見るを能はざ

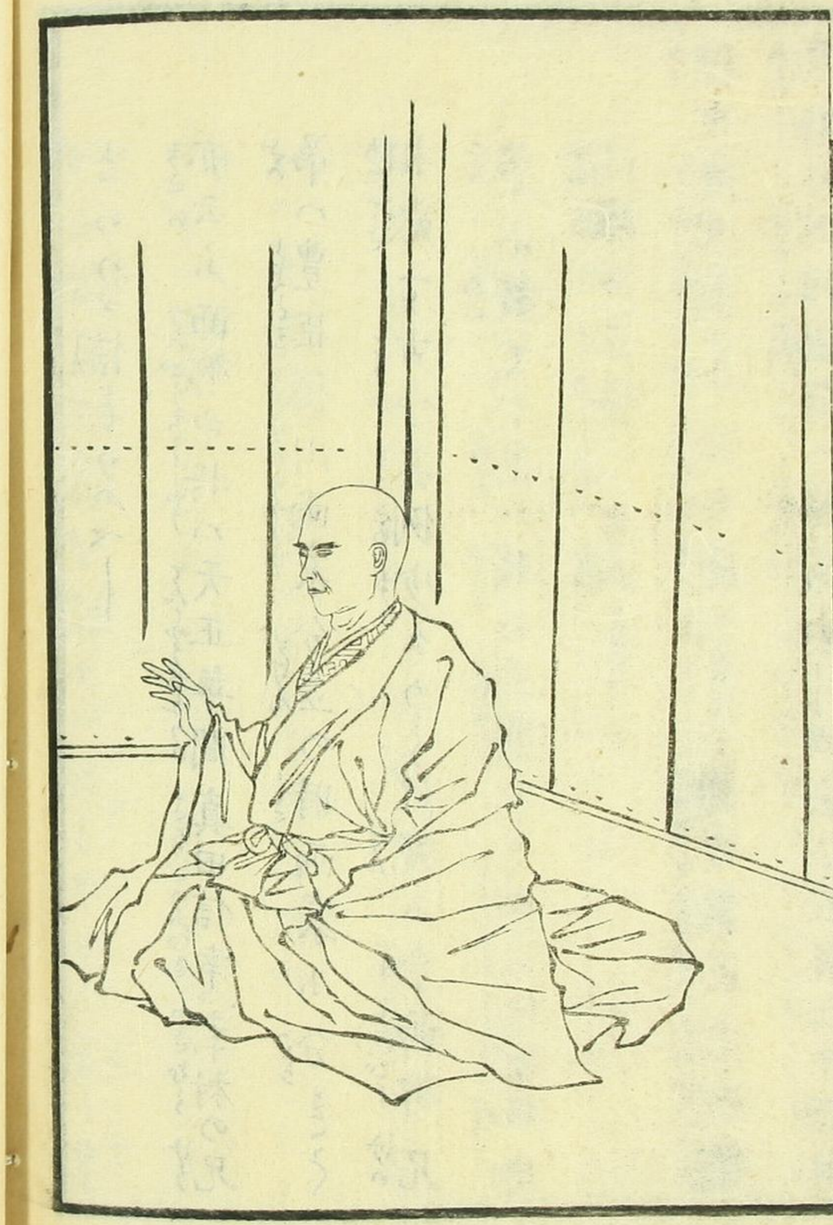
るべしと雖も官軍の将校死して其人に乏しき
お非ざれば何れの日か戦場に出るを得んやと
常の勇氣に替らざれども自ら目元うるをた
り又言いるにい嗚呼兄をして今少し早く歐羅
巴を見せしめむや此拳に至るべきと坐に涙を催
されしとかあり

編者云ふ保元平治の役ふい義朝の親為義
い自餘の國守に任じて何とか欲せんや年六

十三まで終ひよ受領もせざりける日来より地下の検非違使ふくあり謀叛よ與して其罪科を犯せるものい親とて助けがたく改道を汚さん天下い是れ一人の天下よりず天下の天下ゑり政道を正し刑を行ひ孝道よ。を
むゝん義朝の身よおひて父を誅せしむるよ
忠とび君ふゝる孝とび父ゑゝり罪既よ斬
刑ふ當る為義を誅せバ信とやせん若し忠

とゝいゝ信とゑべし
亦云ふ西郷中将い天正年間真田信幸。幸村の兄
弟い豊臣徳川両家分立の時両家ふ分まとく
相敵す古今其例少ゑゝ現ふ今西郷兄
弟ふ於てい兄い賊の大将たり弟い陸軍卿の
代理ふく勤王の人ゑり
偖も鹿児島よて難よ逢りまし権中教正大洲鐵
然師い此頃西京へ帰られしが去る三月二十四日

中原鐵然師
宮内省へ鹿
兒嶋見聞記
と差出す

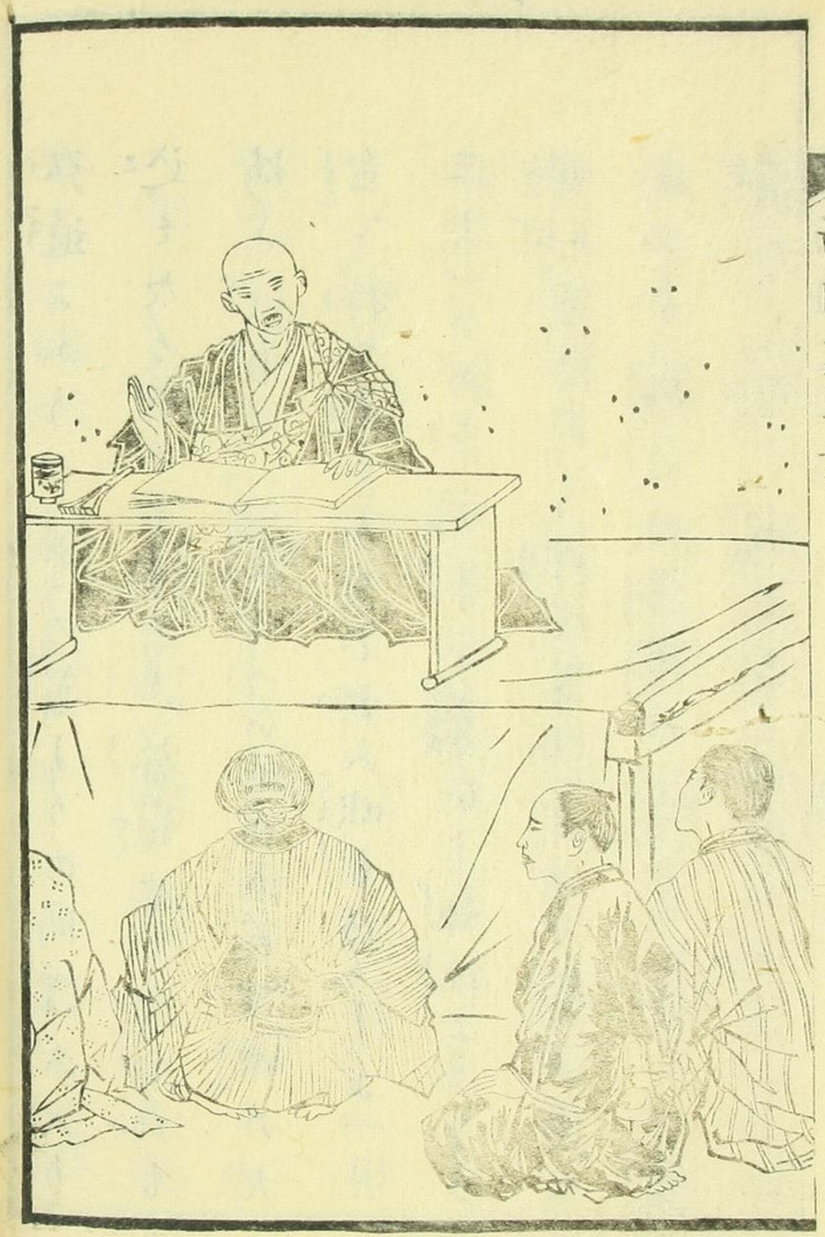


宮内省へ召出され卿輔と云ひ彼地の景況を委しく聞取られし又中原尚雄以下も真宗の僧香川黙識ハ鹿児島縣下同し景況を知るゝ足らび聊ゝ爰ゝ記して真宗の僧ハ近頃佛法弘通と勤め遠く海外まで渡る程の志も多く近き皇國中の鹿児島ゟも此道の行ハるゝやうふとりし其筋の人として派出せしめて漸く説教の道を弘められしかゝた今ハ公ゝ説教所と建て盛ゝ信者の望

ふかゝ人しとゝ

一説ゟ大洲鐵然師を始ゞめ僧八人ゟて鹿児島縣下へ赴かれ燈籠通りの酒匂正五郎の家を旅宿と定めらるしハ去年十月二十八日ゟりまゞ其地の區戸長ゟ付て説教所と設立る為め便宜の地を買求むし縣廳ゟも其の事由とのゝべて種々説れ抄々しくハ整いずして漸くゝ同し町ゝ二千坪ばかりの

地所を買得て建築に着手したり此區長酒匂正五郎は私学校より擢んで任ずる者にて縣官の八九等位の勢ひあり先年より説教も行つきたりしの度の支ふも及びしに熊本萩の騒ぎの後は人気も変りて一向宗は昔の仇敵なりしを島津家の下風にたつ者にて是を信者に兼て渡し置る真宗帰依の印艦も悉く返すやうにて名を仏法弘通にかこつけの筋よりの間諜に入り込たるものもあらん旅宿せし酒匂氏も時々説教所設立にて五百万田の大金を持ち来りなど云ふ咄もなりしに一月三十一日の夜弾薬を奪ひし動揺よりなる嫌疑もまたく深くなりしに翌日酒匂氏より旅宿の立拂ひとなりなられ餘義なく外に宿をもとめんと依頼るけ



酒匂の宅ふ真宗の僧説教す

もども誰一人請けでみたものもうきに唯間諜のありとの風聞のやうやく盛ふるまゐなりもたゞ今ゐたや詮方なくく彼の説教所ふ設立たるところの八畳敷なる一下間ふ立入りたもど如何せん夜ハ学校生徒の暴行あらんも計りがくけもを種々ふ心を配り鐵然師を所々ふ潜を隠しなるとうふあり

是より水留八代口の激戰續て二重峠へ兩進擊並ふ抜刀隊の者大奮發ふよつて大ふ勝利ありつる譯を第六編ふ記載すべし

西南太平記五編巻之下終

明治十年四月四日御屆
同　十年五月一日出板
東京堀江町二丁目二番地
安達平七止宿
茨城縣平民
編輯兼出板人　沼尻紲一郎
定價廿二錢五厘

萬笈閣製本各地專賣書籍館
江島喜兵衛
東京
北畠茂兵衛
稲田佐兵衛
山中市兵衛
小林新兵衛
九家善七
村上勘兵衛
中村佐助
牧野吉兵衛
柳川梅次郎
水野慶次郎
東京
林萬次郎
石川治兵衛
荒川藤兵衛
太田金右衛門
北澤伊八
朝倉久兵衛
青山清吉
鈴木忠藏
山中孝之助
山中北郎

東京　山田藤助　東京　吉川半七
同　東生龜次郎　甲斐山梨　内藤傳右衛門
同　岡田文助　伊豆三島　小西又三郎
西京　大谷仁兵衛　武藏深谷　酒井省吾
同　永田調兵衛　同　小野脩三
同　藤井孫兵衛　同　鴻巢長島為一郎
大坂　柳原喜兵衛　下総佐原　朝野利兵衛
同　前川善兵衛　同　野田　茂木林藏
同　前川源七郎　同　布佐　榎本次郎右衛門
同　吉岡平助　同　谷市場　太田儀助
同　松村九兵衛　常陸長竿　菊池儀助
同　岡田茂兵衛　美濃大垣　岡安慶助
同　梅原龜七　同　平野利兵衛
同　中島德兵衛　同　久保田鋏藏
同　赤志忠七　同　岐阜　水谷善七
伊勢四日市　伊藤善太郎　同　山岸彌左衛門
同　山田　加藤長平　同　笠松　玉井忠造
尾張名古屋　片野東四郎　信濃長野　西澤喜太郎
同　栗田東平　同　上田　伊藤甲造
同　矢田藤衛　上野桐生　竹内藤吉
同　鬼頭斗衛　下野宇都宮　崎尾新右衛門
同　鬼頭松次郎　同　田野邊忠兵衛
同　三輪伊六　岩代若松　森萬助
同　三輪文次郎　同　福島　齊藤彦太郎
三河舉母　菅江笑三　陸前仙臺　菅原安兵衛
同　岡崎　伊藤文吉　同　白木安右衛門
同　新城　蔦家英吉　羽後秋田　本間金之助
同　豐橋　高須又八　羽前上山　高橋庄三郎

遠江濱松　落合清七
同　松塚聚人
同　齋藤太兵衛
同　山下仁兵衛
同　一貫社
同　白水健二郎
同　見附古澤良作
同　二俣天井金藏
同　掛川大塚好五郎
駿河藤枝淺井安兵衛
同　靜岡佐藤俊平
同　沼津廣瀨市藏
同　小松浦吉成壽三郎
同　吉田市村五郎兵衛
同　平田彌平治
同　中川久助
越中富山土井宇三郎
同　守川吉兵衛
同　中川甚藏
同　大橋甚吾
同　川上章
同　高岡車平次郎
越後長岡中村作平
同　松田周平
同　葛塚弦卷七十郎
同四ツ谷濱村佐藤友吉
周防山口阿部準輔

010190507659